

第271回 今月読んだ本  
福本和夫 思想の再解釈  
－「福本イズム」から「日本ルネッサンス史論」へ（24）

## 第10章 「日本ルネッサンス史論」の完成 (1967-1969)

### 4 具体的な内容はどのようなものか（続）

#### 第26章 日本ルネッサンスの印刷術と中国・朝鮮・西洋との比較

活字による印刷術は、中国北宋の畢昇（972-1051）が1040年代に膠泥活字（粘土を膠で固めて焼いた活字）を發明したことを嚆矢とする。ドイツのグーテンベルク（1398頃-1468）による鉛活字（活版印刷術）の發明より約400年も先んじている（『グーテンベルク聖書』1455年、1頁42行であることから『42行聖書』と言われる）。木活字を初めて本格的に利用したのは元代の王禎（生没年不詳）である。木活字3万余個によって『農書』（1313年、全22巻あるいは全36巻）を印刷した。銅活字は宋代に發明され明代で広く利用される。16世紀初頭に利用された鉛活字は普及しなかった。明代から清代にかけての主要な版式は木版印刷（整版）であり、銅活字、木活字、泥（陶）活字の復活もあった。

朝鮮半島の李王朝（1392-1897）では木活字、鉛活字がさかんに用いられ、鉄活字も一時的に利用された。（1974年にフランスで発見された『直指心体要節』は1377年刊行であり、世界最古の金属活字印刷本とされている。）

豊臣秀吉（1537-1598）の2度にわたる朝鮮出兵の際、朝鮮半島から銅活字や木活字が伝わってくる。家康は銅活字や木活字による書籍の刊行をさかんに行わせた。銅活字は次第に利用されなくなる一方で木活字はしばらく使われ続ける。正保元（1644）年以降は木版（1枚版、製版）が主流となっていた。木活字が復活したのは寛政年間（1789-1801）から明治10（1877）年までであった（幕末から明治維新にかけての近代的な鉛活字の印刷術について多くの頁が割かれている）。日本で鉛活字、銅活字が主流にならなかった理由は、金銀の精錬用に用いられる鉛は不足していたこと（長崎でオランダ、中国から買い求めていた）、銅は輸出貨物の最大部分を占めていたことである。

日本ルネッサンス期に普及した木活字本・木版本の精巧さは、明代清代と比較しても技術面に遜色はない。浮世絵の錦絵版画は、その多色刷の絢爛豪華さにおいて中国、西洋の版画よりはるかに優

れている。後年、フランス印象派の誕生に直接的な影響を与えたのが浮世絵版画であったことは偶然でなかろう。

### 第27章 商業資本と商人の是認論を積極的に唱えた人々の系列

商業利潤を是認し商業道を説く石田梅岩（1685-1744）は享保14（1729）年に京都で講筵を開いた。石門心学は幕末までの130年余りの間に、関東から九州まで173箇所的心学講舎で講じられている。

儒教・仏教・神道の三教一致論のうち、石門心学は商人出身者による儒教中心の三教一致論であった。これに対して、二宮尊徳（1787-1856）の農民出身者による復古神道中心の報徳教、大原幽学（1797-1858）の武士出身者による儒教中心の性理学がある。

### 第28章 田能村竹田と詩余ならびに煎茶会（21頁）

中国では「漢文、唐詩、宗詞、元曲」と言われるように、漢代は漢文章、唐代は漢詩、宋代は詩余、元代は戯曲が流行した。「詩余」は長短を交えた躍動的な音律によって表現するために「長短句」とも呼ばれる。元代明代では衰微したが、清代に至って再流行し、毛沢東（1893-1976）はその系譜に連なる。

文人画家の田能村竹田は詩余の愛好家であった。イギリス最初の『英語辞典』（1755年）の編纂者で有名なサミュエル・ジョンソン（1709-1984）が茶を飲みながら「文学クラブ」（1763年設立）で語り合ったように、竹田は煎茶会を開いて上田秋成、頼山陽、池大雅らと交遊した。

### 第29章 異色の学者6人—貝原、田中、富永、三浦、鷹見、鈴木

貝原益軒、田中丘隅（1662-1729、農政・民政の意見書『民間省要』全15巻、1721年。を刊行して8代將軍吉宗に献上）、富永仲基（1715-1746、仏教・神道批判）、三浦梅園（1723-1789、宇宙と思索の構造を解明する弁証法に類する条理学を展開）、鈴木牧之（1770-1842、『北越雪譜』で有名、雪の結晶35種を図解）、鷹見泉石（1785-1858、雪の結晶86種を図解）は見過ごされがちだが、注目すべき価値ある業績を残した異色の存在である。

### 第30章 小説家西鶴と馬琴の対比

町人出身の井原西鶴（1642-1693）と武士出身の滝沢馬琴（1767-1848）は日本ルネッサンスの始期と終期を代表する二大巨星である。

西鶴の代表作は『好色一代男』（1682年）、『日本永代蔵』（1688年）、『世間胸算用』（1692年）などである。それらの著作に見られる自由恋愛論、技術論、商業資本論をはじめとした諸

論点は、最も目醒めたルネッサンス人の面目躍如たる自由闊達さを示している。

馬琴の代表作は戯作文学の傑作『南総里見八犬伝』（全98巻、1814-1842年）である。馬琴と北斎の交遊は有名であり、互いに刺激を受けていた。堅物ですぐに説教を始める馬琴は、『赤蝦夷風説考』（1781-1783年）で有名な仙台藩江戸詰藩医の工藤平助（1734-1801）の娘、只野真葛（1763-1825）と書簡の遣り取りをしていた。きっかけは真葛が自ら執筆した経済論の草稿を馬琴に添削してもらったことにある。わずか一度であったが、歌の贈答もしている。しかし、良寛（1758-1831）と貞心尼（1798-1872）のような関係にはならなかった。馬琴は、世の疑惑を受ける恐れもあるとして、一方的に関係を絶った。馬琴は最後まで武家階級に対するこだわりを捨て得なかったのではないか。

### 第31章 談林俳諧から芭蕉・蕪村の俳句まで

新興町人階級の生活を、町人自身の眼で見て、町人自身の手で把握し、町人自身の言葉で表現しようとしたのが談林派の俳諧である。西山宗因（1605-1682）の門下には西鶴らがいる。

松尾芭蕉（1644-1694）は「古人の心を求めて、古人の跡を追わず」という「復古生新」の方法論によって蕉風俳句を樹立した。その他には、異色の俳人として小林一茶（1763-1827）、南画家でもあった与謝蕪村（1716-1783）らがいる。

### 第32章 滑稽・諧謔を旨とした大阪狂歌と皮肉・風刺を主とした江戸狂歌

狂歌は大阪から起こって京坂の地でさかんに詠まれた。開祖は大坂御堂筋前で宮廷御用貸家を営んでいた鯛屋貞柳（1654-1734）である。時の政治批判を避けたところに貞柳狂歌の限界があった。

貞柳より70年遅れて、馬宿と煙草屋を営む平秩東作（1726-1789）が江戸狂歌の先駆者となった。その後、幕臣である内山賀邸（1723-1788）が大成し、四方赤良（1749-1823）、宿屋飯盛（1753-1830）らが続いた。

### 第33章 近松門左衛門と竹田出雲の戯曲（3頁）

近松門左衛門（1653-1724）が初めて世話物に力を傾注し、情死、姦通、駆け落ち、殺人などを取り上げたことは、近松の戯曲がルネッサンス期の反映だったことを物語る。カラクリ人形座を始めた竹田近江の子である竹田出雲（1691-1756）は、描写的で劇的な作風によって人形浄瑠璃を極点まで高めた。

### 第34章 源内の戯作『風流志道軒伝』を中心に

平賀源内は戯作『風流志道軒伝』（1763年）を発表する。浅草の講釈師、深井志道軒が仙人から羽のうちわを授かって大人国、小人国、足脚国、穿胸国などを巡歴、女護国に漂着して遊郭を開くという物語である。室町後期のお伽草紙にヒントを得たと思われる。イギリス文学史の中で随一の諷刺作品であるスウィフト（1667-1745）の『ガリヴァー旅行記』（1726年）に不思議に類似しているのには驚かされる。

戯作者の系譜には、山東京伝（1761-1816）、十辺舎一九（1765-1831）、式亭三馬（1776-1822）、柳亭種彦（1783-1842）、為永春水（1790-1843）らがいる。

### 第35章 山椒のような辛みをもった五七五の社会詩

浅草の寺侍であった柄井八右衛門川柳（1718-1790）は『万句合』<sup>まんくあわせ</sup>（1757年）を創刊する。あらかじめ前句（七七）を出題、一般から附け句（五七五）を募集し、秀作を摺り物にして配布した。呉陵軒可有<sup>あるべし</sup>（生年不祥-1788）が『万句合』の中から前句を省略しても意味の通ずる756句を選び出版したのが『誹風柳多留』（1765年）である。柄井川柳の選から始まったので、この最短詩形を「川柳」と呼ぶようになった。市井の庶民の生活から生まれ出た社会詩であり、社会に対する雑多な笑いの詩、人生の矛盾をチクリと突いた山椒のような詩である。

### 第36章 書体・書風の変遷と復古生新の法則

書体・書風の変遷には、日本ルネサンス期の特色であるは復古生新の法則が貫徹している。和洋（仮名）書家、唐様（漢字）書家、幕末から維新前後・明治年代にかけて和洋（仮名）書家、唐様（漢字）書家の系譜が続いていく。この時代に最も清新高雅な書体・書風を展開した第一人者は良寛であった。（清代の碑学派の日本への影響も論じられている。）

### 第37章 ルネサンス中期におこった考証学とその3系列

ルネサンス中期、本格的に考証学が展開されるようになった。儒学、国学、戯作者・小説家による3系列の考証学が起こる。各系列の主な考証学者は、儒学では吉田篁墩（1745-1798）、狩谷棧斎（1775-1835）、渋江抽斎、国学では山岡明阿弥（1726-1780）、塙保己一（1746-1821）、戯作・小説では山東京伝、滝沢馬琴らがいる。

### 第38章 各種辞典類の続出

日本ルネサンス期には各種辞典類が相次いで出版された。代表的な百科事典類を挙げると、貝原益軒『万宝鄙事記』（1705年）、寺島良安（1654-没年不祥）『和漢三才図会』（全105巻、1712年）、北斎『北斎漫画』（全15編、1814-1878）などがある。

### 第39章 日本ルネッサンスの勃興・発展とその反動・抑圧

日本ルネッサンスの勃興・発展の時期は4つに分かれる。第1期(始期)は寛文元(1661)年から貞享4(1687)年までの27年間で、4代将軍家綱(在職1651-1680)から5代綱吉(在職1680-1709)の時代にあたる。第2期は元禄元(1688)年から宝永6(1709)年までの22年間である。この間、柳沢吉保(1659-1714)が権勢を振るった。第3期は6代将軍家宣が在職中の宝永6(1709)年から正徳2(1712)年までのわずかに4年間で、新井白石執政の時代(「正徳の治」)にあたる。第4期は延享2(1745)年から天明4(1784)年までのおよそ40年間で、田沼意次(1719-1788)が第9代将軍家重(在職1745-1760)、第10代家治(在職1760-1786)に仕えた時期にあたる。意次の子で異例の出世を遂げた若年寄の意知(1749-1784)が江戸城内で刺されたために急速に権勢が衰え、いわゆる「田沼時代」は終焉する。

反動・抑圧の第1期は、白石の礼楽政治(復古生新)に対する反動として家康・家光の方針を中興することを大方針に掲げた8代将軍吉宗(在職1716-1745)の約30年にわたる治世(「享保の治」)である。儒教改革、学芸復興全般に対する全面的積極的な反動・抑圧の第2期は、田沼政治を一掃するために登場した松平定信(1759-1629)による「寛政の治」(1787-1793)の7年間であった。幕府の忌諱に触れて処罰された陽明学者、復古儒者、国学者、蘭学者、浮世絵画家、戯作者など数多い(福本はそれらの人物を逐一挙げている)。

#### 第40章 八代将軍吉宗の政治施策を検討する

享保5(1720)年、吉宗は漢訳洋書の輸入を禁じた「洋書の禁」を緩めた。日本の暦法を改良しようとする動きが理由の一つであった。さらに、吉宗は物産、蘭学の奨励と大規模な治水干拓事業(利根川、木曾川、印旛沼など)を推進した。「御法度の旨をよく守りて、朝夕忘れざれば、疑なくその身は治まり候」、「御高札のおもてに背がず候ようにと、心がけ候」、「時々まわる御触書をきつとうつして、はりおき、家内の男女上下とも読み聞くべし」といった道徳訓を根本義とする「談義物」(庶民生活を風刺する滑稽な通俗小説)が吉宗の治政下で盛行する。徹底した公式主義、追随主義の思想を普及、鼓舞しようとしており、絶対主義の天皇制国家を賛美する「教育勅語」と軌を一にする。

#### 第41章 蘭学伝来の意味するもの

日本ルネッサンスが蘭学によって活性化されたことは否定できないが、蘭学伝来以前にルネッサンスが始まっていたことを忘れてはならない。吉宗による「洋書の禁」緩和は天文学、医学、自然科学

(物理学、化学、植物学など)、兵学などの分野に影響を与える。蘭方天文学者には麻田剛立(1734-1799)、高橋至時(1764-1804)、蘭学者・蘭方医には檜林鎮山(1648-1711)、前野良沢、杉田玄白、司馬江漢、桂川甫周(1751-1809)、稲村三伯(鳥取藩医、1758-1811)、宇田川榕庵、緒方洪庵(1810-1863)、蘭方兵学者には高島秋帆(1798-1866)、佐久間象山(1811-1864)らがいる。

#### 第42章 造船・航海技術の復興論並びに開国論の擡頭

鎖国政策のために造船・航海技術が衰退して難破漂流船が続出した(本稿第9章第2節で言及した『漂流船物語の研究』1944年、を参照―岩田注)。幕府は漂流船物語の伝播を抑圧する。生還者がキリシタンになってまもしれないこと、漂流民の口から異国の新文化や政情が民衆に伝わることを極度に怖れたからである。しかし、漂流船物語は写本の形で広く愛読されていた。

嘉永6(1853)年、幕府は500石以上の大船製造と3本マストの禁を解いた。寛永12(1635)年の大船禁止令からおよそ220年後のことである。同じ時期に開国論が台頭してくる。工藤平助、林子平、本多利明、佐藤信淵らが代表的な論者である。

#### 第43章 百姓一揆・都市の打ちこわし・抜け参り

ドイツ・ルネッサンスにおいてミュンツァー(1489-1525)を指導者とする農民戦争(1524-1525)が発生した。農民戦争はドイツだけでなくフランス(ジャックリーの乱、1358年)、イタリア(一揆・反乱を表す「トゥキナッジオ」、14世紀中期-1387の一連の農民戦争を指す)、イギリス(ワット・タイラーの乱、1381年)でも起こっている。

日本の百姓一揆の件数は江戸時代に601件、年平均で2.3件発生している。慶長8(1603)年から万治4(1661)年までの59年間で年平均1.4件だったのに対して、幕末の天保元(1831)年から慶応4(1868)年までの39年間で年平均3.9件と3倍になっている。参加者が5万人を越えた代表的な百姓一揆は、磐城平藩元文一揆(1738年、8万5千人)、鳥取藩元文一揆(1739年、5万人)、久留米藩大一揆(1754年、16万8千人)、伝馬騒動(1764年、武蔵・上野・信濃・下野の20万人)などがある。

農村の一揆(農民闘争)の頻発と平行して都市では「打ちこわし」運動が起こっている。そのうち最も計画的だったのは天保8(1837)年の大坂における大塩平八郎の乱であった。

百姓一揆や打ちこわし運動のように抗争的破壊的ではなかったが、日本ルネッサンス期には全国各地から伊勢へ向かう自然発生的

な「抜け参り」が周期的に繰り広げられた（本稿第9章第2節で論じた『抜け参りの研究』1943年、を参照—岩田注）。

#### 第44章 日本ルネッサンス期のユートピスト

日本ルネッサンス期はトマス・モア（1478—1535、『ユートピア』1516年）、トマス・カンパネラ（1568—1639、『太陽の都』1602年）のようなユートピストを輩出している。秋田に生まれ奥州八戸で医を業とした安藤昌益（1703—1706）、秋田の西馬音内に生まれ各地を遊歴した佐藤信淵である。

佐藤は『垂統秘録』（1832年頃に口述、没後7年の1857年に刊行）において、日本全国に「三台」（神祇台、教化台、太政台）と「六府」（本事府（農業）、開物府（鉱業・林業）、製造府（工業）、融通府（商業）、陸軍府、水軍府）を設置し、人民を「八業」（草、樹、鉱、匠、賈、傭、舟、漁）に従事させる（兼業禁止）国家社会主義的な日本を構想した。

モアやカンパネラに並び称されるべきは安藤昌益であろう。『自然真営道』（1753年、全101巻93冊）の自筆本が狩野享吉（1865—1942、当時は第一高等学校長、後に京都帝国大学文科大学長）によって発見されたのは1899年であった（関東大震災で焼失し、現存する自筆本は15冊のみ）。

社会生活の根本は「直耕」（農業、漁業）であり、商業その他の生業、身分・階級はすべて無用有害として否定され、現在の「法世」をそれ以前の理想社会「自然の世」まで高めなければならない。『自然真営道』が提示する思想は、共産主義、アナーキズム、エコロジー、農本主義に通ずる。（第24巻は28種の鳥類が「法世」を痛烈に批判するユニークな物語である。）

#### 第45章 日本の近世史にはルネッサンス時代のあったことの傍証

徳川時代にルネッサンス期があったわかりやすい傍証を6つ挙げてみよう。

第1に、イタリア・ルネッサンスと同様に復古生新の法則が貫かれていること。第2に、西洋のルネッサンスでも日本でも農民戦争・百姓一揆が断続的に頻発したこと。第3に、フィレンツェ、ミラノ、フランス、イギリスなどでも大坂、京都、琵琶湖、名古屋、仙台などでも運河が開鑿されたこと。第4に、解剖学の進展が西洋ルネッサンスと日本ルネッサンスに共通していること。第5に、自国語の復興（ダンテ『神曲』、チョーサー『カンタベリー物語』、新井白石『折り焚く柴の記』、荻生徂徠『政談』など）である。第6に、イタリア・ルネッサンスのレオナルド・ダ・ヴィンチ（1452—1519）、オランダ・ルネッサンスのピーテル・ブリューゲル（1525/30—1569）の二大巨匠と北斎の間に驚くばかり多くの一致

点、類似点が見出されることである。

ダ・ヴィンチと北斎の一致点の第1は両者ともに自然を師とする根本理念、第2は画境転心説、第3に森羅万象主義、第4に人間の解剖学に対する共通の関心、第5に自然の幾何学的解剖学、第6に手の運動一手の表情の画家であること、第7に両巨匠ともにカラクリ技術に深い関心を寄せていたことである。

ブリューゲルと北斎の類似点は、子ども・盲人の画家であること、海と船への尽きない関心、機構美・技術美に対する関心の広さと造詣の深さ、鳥瞰的な遠近法であろう。

#### 第46章 明代・清代の中国にルネッサンス期があったか

中国の学芸が日本に刺激を与え続けたのは間違いない。宋代における朱子学、煉丹術、明代清代における医学、本草学、「古文辞」運動、兵学、技術（『天工開物』1637年）、木版画、航海術（鄭和の7回にわたる大航海）などは日本ルネッサンス期の発生・発展に少なからず影響を及ぼしている。明代清代ではルネッサンス的なものが部分的、要素的には発生してきたが、日本ルネッサンスのようにまとまった一大運動にはならなかったことは大変惜しまれる。

#### 第47章 明代・清代の中国にルネッサンスがなかったことの傍証

明代清代に「人間の発見」がなかったことの傍証は絵画、小説に傍証を求めることができる。

『芥子園画伝』（第1集1679年、第2・3集1701年）は清代・康熙帝の時代に出版された絵画技法の教科書であり木版多色刷技法で制作された。日本では元禄年間（1688-1704）に伝来し、復刻されて大きな影響を与える。『芥子園画伝』は山水山石、花鳥草木を主眼とする伝統を脱しておらず、独立した人物画の展開を見ることができない。

これに対して、日本ルネッサンス期の浮世絵木版画には役者絵、美人画、春画などのジャンルがある。『北斎漫画』全15編は、人間のあらゆる姿態をその動態において捉えるルネッサンス的な絵画の百科事典と呼ばれるべきものである。また、『北斎漫画』を含めて「職人尽絵」というジャンルがあり、数多くの産業技術書・生産技術書には多種多様な職人の姿が描かれている。

『天工開物』は18部門から成る産業技術書である。貝原益軒が引用し木村兼葭堂が秘蔵していた。平賀源内も読んだといわれている。中国本国では長らく見失われており、大坂の復刻版（1771年）を1930年に再刊したという。日本の職人尽絵に類するものは皆無であったといえる。

田山花袋（1872-1930）は「西鶴小論」（1917年）で、西鶴をモーパッサン（1850-1893）、ゾラ（1840-190

2)、チェーホフ(1860-1904)と対比しているが、イギリス・ルネッサンスを代表する劇作家シェイクスピア(1564-1616)と比較すべきではなかったか。西鶴とシェイクスピアは東西ルネッサンス文学の代表的作家である。両者ともに商業資本、高利貸資本について格別の関心を抱き精細に描出した。明代清代には西鶴と比較すべき世界的巨匠が見いだせない。(第47章はあくまでも傍証であって、ルネッサンスがなかったことに対する十分な論証たりえていない—岩田注)

#### 第48章 ルネッサンス期に次いで日本にも啓蒙期があった

日本ルネッサンス期は嘉永3(1850)年に一応終わる。啓蒙期は、幕府によって蕃書調所が開設した安政3(1856)年(福本の安政4年とするのは誤り)から中江兆民(1847-1901)がルソー(1712-1778)の『社会契約論』(1762年)を『民約訳解』として翻訳紹介する明治15(1882)年までである。

啓蒙家の系譜には、西周(1829-1897)、津田真道(1829-1903)、神田孝平(1830-1898)、中村正直(1831-1891)、福沢諭吉(1834-1901)、加藤弘之(1836-1916)、森有礼(1847-1889)、中江兆民(1847-1901)、加藤弘之(1836-1916)らがいる。西、津田、神田、加藤は蕃書調所の関係者であり、西、津田、神田、中村、福沢、加藤は明治6(1873)年に森らが創刊した『明六雑誌』で活躍した。

漢学の素養が浅い福沢諭吉は、復古儒学や復古医学に対する、すなわち日本ルネッサンスに対する理解が全く欠けていた。朱子学とそれに対抗するさまざまな動きを区別せずに「偏重の禍」として排撃した。福沢が日本ルネッサンス文化を十分に理解していれば、その後の西洋文明、西洋実学の輸入・啓蒙の内容、方向性が異なるものになったのではないか。

#### 第49章 わがルネッサンスが国内に与えた影響

日本ルネッサンスの発生は、徳川時代に町人階級の本格的な勃興を見たことの反映である。町人階級の抬頭によって起こったルネッサンスが各種生産部門にマニュファクチュアの成立・発展をもたらしたからこそ、明治維新はブルジョア革命たりえたのである。封建的残渣は留めているとしても明治維新は封建革命ではない。マニュファクチュア(手工業的工場制)は明治期に徐々に機械化されていき、近代工業資本主義の機械的大工場制に転化していく。

幕末の志士の多くはルネッサンスの代表的諸家に学んだ。素行学派の吉田松陰は長州藩が萩に設置した野山獄に幽囚される。そこで『論語』『孟子』を講じ、松下村塾で写本として流布したのが『講

孟余話』である。松蔭の忠孝一致論、忠孝不二論、絶対主義的理念は、後の「教育勅語」（1890年）の「よく忠に、よく孝に、億兆心を一にして、世々その美をなせるは、これわが国体の精華にして」に繋がる。しかし、これは儒教本来の精神ではない。仁斎、徂徠らの復古儒学者はもちろんのこと、陽明学者の大塩平八郎も「道の要はただ孝にあるのみ」と大いに孝を強調する。儒教の精神を歪曲して父子関係を君臣の関係にまで拡大解釈したものにすぎない。

君臣父子の関係を同一視する理念が明治維新後の絶対主義天皇制のイデオロギーを胚胎・培養することがなければ、悲惨な一大敗戦を経験することなく、別の道を辿ったであろう。

### 第50章 わがルネッサンスが海外に与えた影響

日本ルネッサンス文化のうち最も大きな影響を海外に与えたのは浮世絵である。とりわけヨーロッパの芸術家たちは北斎の風景画と『北斎漫画』には目を眩り、印象派芸術誕生のきっかけになった（本稿第9章第3節を参照—岩田注）。

徂徠の『弁明』『弁名』（ともに1717年）は天保年間に清代で翻刻されて影響を与えた。また、清代末期から中華民国時代にかけて日本ルネッサンス期の数多くの医学書が翻訳紹介されている。

以上、各章の概要を記した。頁数が必ずしも議論の粗密につながるわけではないが、読者は1つのテーマで10倍以上の差があることに違和感を覚えるのではないか。また、専門家が自身の専攻分野を読めば、添削箇所まで真っ赤になることは十分に予想される。

細部には異論が噴出するのは間違いない。しかし、法制史、経済史、産業技術史、国史、東洋史、西洋史、哲学、哲学史、文学、芸術、科学、医学、等々、気の遠くなりそうになるほどの膨大な史料・文献を渉猟した『日本ルネッサンス史論』に対しては、福本の主張に賛同しなくても敬意を表したくなるのではないか。

それを「ルネッサンス」と名づけようが名づけまいが、徳川日本に巨大なうねりがあったことは否定できまい。タコツボ化した専門家たちには、このような超横断型の著作は決して成し得ないであろう。清水多吉が指摘するように、まさしく「エンサイクロペディア」である。

1936年に着想した日本ルネッサンス史論は獄中で少しずつ形になっていく。紙風船に書いた原稿を差し入れの百科事典に挿んで少しずつ非合法に獄外に持ち出した第1次草稿は1941年12月、釈放される2ヶ月前に完成する。第2次草稿（1942年11月）に次いで第3次草稿は1946年10月に完成（400字詰原稿用紙1330枚）、『日本近世の文化革命』（1949年10月）となる。最終稿となる第4次草稿（1400枚）は1964年5月に完成

した。第3次から第4次まで18年もの間隔がある。原稿用紙の枚数がそれほど違っていないことを考えると、戦後の政治活動の再開による執筆の遅延はあったにせよ、推敲に推敲を重ねたことがよくわかる。

福本の初期3部作は短期間で執筆され彗星のごとく世に現れた。それに対して、ライフワークである『日本ルネッサンス史論』は獄中14年、推敲執筆28年をかけて熟成させた大作、大業である。

日本ルネッサンス史論を一応完成させた福本は、1983年に没するまでに何を遺したか。